

## 相互行為・文法・予測可能性 ——「ていうか」の分析を例にして——

若松 美記子  
細田 由利

### はじめに

「ていうか」という表現は、しばしば若者語の一つとして注目を浴びることが多いが(本名, 1999; 沖, 1999)、この論文では若者語としての「ていうか」の語彙分析ではなく、実際に録音録画した相互行為(interaction)のデータを用いて、会話分析的視点からの考察を行う<sup>1)</sup>。その際には、「ていうか」という表現の様々な使用のバリエーションに注目し、分析を行っていきたい。この論文の目的は、参加者(participants)が相互行為の中で用いられている文法(grammar)に基づいて、予測可能性(projectability)を引き出しながら相互行為に参加しているという点を「ていうか」の分析を通して示し、考察を行うことである。この予測可能性という概念はこの論文におけるキー概念であるが、この概念は簡単にいえば、相互行為において用いられる語彙や表現などが、これから発話がどのように進んでいくかといったことや、発話がどこで終了するのかといったことを参加者に予測させる手がかりを与えることである。

以下では、まず、「ていうか」が相互行為の中で担っている機能を見極めるために、文法的意味と形式について考察し、それをふまえてデータ分析を行いたい。

### 1. 「ていうか」の文法的意味と形式

相互行為の中で使用される「ていうか」というひとまとまりの表現の文法的意味が、参加者の予測可能性を引き出す機能を担っていることを分析する前に、この表現の構成要素(「て」「いう」「か」)がそれぞれ持つ文法的意味と形式をふまえておきたい。「ていうか」というひとまとまりの表現は、個々の構成要素の意味が複合して、その独特の文法的意味を生じていると考えるからである。

まず、「と」の口語表現である「て」は、一種の「引用マーカー」として、しばしば「いう」と共起し、「ていう」という形で用いられる (Kuno 1973)。ここで重要なポイントとなるのが、「て」は先行する事実性や真実性にたいして話し手が自分の責任 (commitment) を弱める機能を果たしており (Kuno 1973; Itani 1996 ; Hayashi 1997)、そのために「ていう」を用いることによって話し手ではない「誰かの声」を伝えているようなニュアンスを聞き手に与えることができる点である (寺村, 1982)。このことは、「と」や「て」が英語ではしばしば 'people say' と訳されることがあるという指摘と無縁ではないだろう (Maynard 1998)。このように、一種の慣例句としての「ていう」は、先行する自分や他者の発言との間に距離をおき、あたかもその発言を第三者が行ったように聞こえさせる、という意味を持っていると考えられる。さらに、「ていうか」の「か」は英語で 'or' と訳されることからわかるように、その後に「もう一つの可能性」が続くことを示唆している。

以上のことから、「ていうか」という一つのまとまりの表現は、「て」「ていう」「か」という個々の要素の文法的意味が複合して、「先行する自分や他者の発言との間に距離をおき、あたかもその発言を第三者である誰かが行ったように聞こえさせながら、なおかつ、その後もう一つの可能性となる要素が続く」という意味をもっていると考えられるだろう。したがって、「ていうか」という表現は、その文法的意味から、「X ていうか X」という形式で用いられることが多く、このような形式で用いられた場合、「もう一つの可能性となる要素」に相当する「X」の部分は、先行の発言を訂正したり、修正したりする働きをしていると考えられる。つまり、この形式における「ていうか」は、修復を先導する語 (repair initiator) として、しばしば相互行為における修復 (repair) の機能を果たす可能性を示唆しているといえるだろう。

## 2. 修復マーカーとしての「ていうか」

### 2.1 データの分類<sup>2)</sup>

1で見てきたように、「ていうか」というひとまとまりの表現は、個々の構成要素の文法的意味が複合して、その独特の文法的意味や機能、つまり、相互行為の中で修復の機能に関わっている可能性があることが明らかになった。相互行為における修復の機能とは、自分もしくは他者の発話の発話自体、内容理解、又は聞き取りにトラブルがあった場合に生じる反応と定義される (Schegloff, et al. 1977; Schegloff 1992, 1997)。ところが、「ていうか」という表現が「先行する自分や他者の発言との間に距離をおき、あたかもその発言を第三者である誰かが行ったように聞こえさせながら、なおかつ、その後もう一つの可能性となる要素が続く」という文法的意味を持っていることを考慮すると、この表現を単なる修復を先導する語であると捉えるだけでは、十分ではない。たとえば「あそこに見えるのは山っていうか丘

だよ」という表現は、「あそこに見えるのは山ではなくて丘だよ」という表現よりも「山」から「丘」への修復が婉曲的になされているという印象を受けることからわかるように、弱い修復 (mitigated repair) を先導する語と捉えた方が妥当であろう。

このように弱い修復の機能を担う「ていうか」は、実際の相互行為ではどのような形式で用いられ、参加者はどのように発話に関わっているのだろうか。以下の①～④に示すように、「ていうか」が使用されている発話の前後を抜き出してみると、ほとんどのデータでは「ていうか」が「X ていうか X'」という形式で用いられている。先に挙げた「山っていうか丘」の例では、「山」は「X」部分に、「丘」は「X'」に相当する。この場合、「X」は修復されるべきトラブルのターゲット、そして、「X'」は「X」の修復語であり、「ていうか」は修復を導く表現としての修復先導 (repair initiator) となる。

一方で、「X ていうか X'」という形式が構成する「X」「ていうか」「X'」の発話部分に参加者がどのように関わっているのかという点については、様々なバリエーションがある。以下の①～④は、相互行為における修復を包括的に研究したシエグロフらが提示した4つの修復タイプ (以下のi～iv) に相当している (Schegloff et al., 1977)。それらは、i 自己先導による自己修復 (self-initiated self repair)、ii 他者先導による自己修復 (other-initiated self repair)、iii 自己先導による他者修復 (self-initiated other repair)、iv 他者先導による他者修復 (other-initiated other repair) の4つである。分析に際して、データはi～ivの4つのタイプに従って分類されたが、実際は、他者先導による自己修復は1例もなく、自己先導による他者修復のケースも1例しか見つからなかった。この分類の結果は、「ていうか」という表現の特徴と相互行為における文法と予測可能性という概念の結びつきを考える上で重要であるが、まずは、分類したデータを見てみたい。以下のデータの中で、「X」と「X'」にあたる部分は四角く囲ってある。また、トランスクリプトに用いられている記号については付録を参照していただきたい。

### ①自己先導による自己修復

#### (1) Kei & Kaz

X            X'

01 : Kei : 合宿ってのは $\square$ OB $\square$ てか $\square$ OG $\square$ はくるの?

02 : Kaz : あっ、きます。

(1) では、ケイとカズが、カズが勤務している女子校のスキー合宿について話している。ケイは自分が発した「OB (オービー)」という表現を「てか」という修復先導で受けて、「OG (オージー)」という表現に修正している。

②他者先導による自己修復

収集したデータにはこのタイプに該当する箇所がなかったが、どのようなやりとりになるのかということを示すために、以下の創作した例で確認しておく<sup>3)</sup>。

(2) Invented

X

01 : A : あれは $\square$ ?

02 : B : っていうか

X'

03 : A :  $\square$ だよな。

(2) では、A が「X」を導入し、B が修復先導の「っていうか」を導入した後で、さらにA が修復語である「X'」を発している。

③自己先導による他者修復

(3) Mai & Aya

01 : Mai : 親はあんまり：教育にあんまり、その熱心じゃな：い。で：でも、こどもた

02 : ち : も、まあ(.) ( ) なので、なんか：(.)なんていうのかなああ、けっこ

X

03 : う : (.)まあ、 $\square$ っていうか：

X'

04 : Aya :  $\square$ 。

05 : Mai : 問題ありましたよもちろん、だけど：

(3) では、マイとアヤが高校の生徒の親の教育方針について話している。01 行目から 03 行目でマイは、親たちは教育に熱心ではないが、生徒たちの行動は常識的だ、というようなことを話している。この例では、「ふつう常識」という表現が「とくに問題ない」という表現に取替え修復 (replacement repair) されていると考えられる。この場合、修復される語も修復語も主語は「子供たち」であり、「ふつう常識 (的)」と「とくに問題ない」は文法的にも取替え可能な語である。マイは 03 行目で「ふつう常識っていうか：」とだけ言って、その先の「X'」部分を導入していないが、これを引き継ぐ形で、04 行目においてアヤが「とくに問題ない」という修復語を導入している。このように、(3) では、マイとアヤが共同して「子供たちもふつう常識っていうかとくに問題ない」という文を作り上げているといえるだろう。

④他者先導による他者修復

(4) Yoko & Mako

01 : Yoko : おもしろい?

02 : Mako : う ::: ん (.) なんか :: でもあんまりくなさそう>な

03 : (.)

X

04 : Yoko : 結末 ?

X'

05 : Mako : う ::: ん ていうか ドラマ自体 が =

06 : Yoko : => ああ ああ ああ ああ ああく

(4) では、ヨウコとマコがドラマのストーリーについて話している。01 行目の前で、マコはそのドラマのストーリーはおもしろいと評価した。それにたいして 01 行目でヨウコは「おもしろい?」と疑いを示す発言をし、つづく 02 行目でマコが「あんまりなさそうな」と言い直しをしている。このマコの発言には、主語がないことに注目したい。04 行目でヨウコは 02 行目のマコの発言の主語の候補の一つとして「結末?」と聞き返している。それにたいして 05 行目で、マコは「う ::: ん」と発話遅延をさせてから「ていうか」に続いて修復語の「ドラマ自体」を導入している<sup>4)</sup>。このように (4) においても、ヨウコとマコの二人が共同して「結末ていうかドラマ自体 (があまりなさそう)」という文を作り上げていることがわかる。(4) における「ていうか」という表現の用いられ方は、(3) におけるそれと似ているが、両者の発話への関わり方についての相違は明確にしておきたい。(3) では、「X ていうか X'」という形式をマイとアヤが「X ていうか」と「X'」の二つの部分に分けてそれぞれ発していたが、(4) においては、ヨウコとマコはこの形式を「X」と「ていうか X'」という部分に分けそれぞれ発している。前者が自己先導による他者修復で、後者が他者先導による他者修復になるわけである。

(3) と (4) の例で見たように、「X ていうか X'」という形式を二人の参加者がどのように分担して発するのかという点は、一見些細な相違のようではあるが、「ていうか」という表現の特徴を考える上で重要である。この点に注目しながら、以下ではデータ分類の結果について考察してみたい。

## 2.2 考察

以上に示した①~④のタイプは、データの中で均等に見られたわけではない<sup>5)</sup>。①と④のタイプは非常に頻繁にデータの中に見られたにもかかわらず、②のタイプは 1 例もなく、③のタイプは 1 例しか見られなかったことは、先に述べたとおりである<sup>6)</sup>。このように「X て

「ていうか X」という形式が使用されるタイプに大きな偏りがみられたという観点から、相互行為の中で弱い修復の機能を担う「ていうか」という表現の性質を明らかにする手がかりをつかんでいきたい。

以下の表1は、今回のデータの中で見られた「ていうか」の使用についてまとめたものである。表中の①～④は2.1で示したタイプの番号に相当する。

[表1]

修復のタイプ	「X ていうか X」 (今回のデータ)
自己先導による自己修復①	一般的
他者先導による自己修復②	稀
自己先導による他者修復③	稀
他者先導による他者修復④	一般的

表1に見られるように「ていうか」を用いた修復において、稀にしか観察されなかった②、③のタイプと、一般的に観察された①、④のタイプでは、相互行為に参加している二人が、「X」部分、修復先導の「ていうか」、そして修復語の「X」部分からなる修復のシークエンスを産出する際の、その関わり方に違いがあることがわかるであろう。まず、②と③のタイプを見てみると、両方とも修復先導の「ていうか」と修復語の「X」の部分がそれぞれ違う参加者によって産出されていることがわかる。一方、①と④のタイプを見てみると、修復先導の「ていうか」と修復語の「X」の部分は同じ参加者によって産出されている。このことから、「ていうか」とその後続く表現は、①と④のように同一の参加者によって産出される傾向があるといえるだろう。

前述のように「ていうか」は「先行する自分や他者の発言との間に距離をおき、あたかもその発言を第三者である誰かが行ったように聞こえさせながら、なおかつ、その後もう一つの可能性となる要素が続く」という意味をもつ。ここで「もう一つの可能性となる要素がつづく」というところに注目してほしい。発話者は「ていうか」と発することにより、これから「もう一つの可能性となる要素が続く」ことをほのめかしているため、この「もう一つの可能性（つまり修復語）」がそのまま同じ発話者によって発せられる傾向になるのである。「ていうか」が用いられる際のこのような特徴は、参加者にとっては予測可能な表現形式として相互行為に参加する際の資源となっていると考えられ、そのために、相互行為におけるさらなる興味深い現象を産み出している。それが以下で考察する「ていうか」の「転覆的用法(subversive use)」である。

### 3 「ていうか」の「転覆的用法 (subversive use)」

考察してきたように、「ていうか」とその後が続く表現、それら二つは同一の参与者によって産出される傾向にある。この点は、「ていうか」のさらなる別の機能を見極めるためのポイントとなる。この別の機能というのが、これから考察していく「ていうか」の「転覆的用法」である。以下で詳しく「転覆的用法」について説明し、データを分析していくが、その前に、「転覆的用法」を考える上で重要な予測可能性という概念について簡単に見ておこう。

#### 3.1 予測可能性という概念

先にも簡単に触れたが、予測可能性とは、相互行為においてターンがいつ、どのように構成されていくのかについて、参与者がおおまかに予測していくことである。この予測可能性によって、「次の話し手」は「現在の話し手」のターンが終了すると思われる地点（もしくはその付近）で、発話を始めることができるわけである (Sacks, et al., 1974)。

日本語での相互行為においても、参与者がどのようなテクニックを用いて、ターンの軌道を予測しているのかという点については近年盛んに研究されている (Fox, et al., 1996; Hayashi 2000; Hayashi & Mori 1998; Tanaka 1999; 2000; 2001, inter alia)。これまでの研究では、一つのターン内での予測可能性について扱っているものが多く見られたが、もちろん、予測可能性が関連しているのは一つのターンという単位に限ったことではない。複数のターン (multi-unit turns) が続くことを予測させるようなテクニックもある。その一つには、たとえば、物語の前置き (story preface) がある (Sacks, 1974)。わたしたちは会話の中に物語を導入するとき、いきなりその物語を始めずに、まず前置きの部分から話し始める。たとえば、「今日、おもしろいことがあったんだ」という前置きが導入されると、物語の聞き手は、前置きに続いて物語の詳細が語られて、最後には「おもしろい話」の「落ち」がやって来るということを予測するわけである。

相互行為におけるさまざまな予測可能性を「ていうか」という表現が用いられる際の特徴にも援用してみると、「ていうか」が導入された際に、その聞き手は「ていうか」に続いて、さらなる発話、おそらくは修復語に相当する発話が導入されることを予測していると考えることができる。しかしながら、ターンの初めに「ていうか」が導入されたにもかかわらず、その後に修復語に相当する発話を導入せず他の活動が行われることがある。このような活動を行うのが、「転覆的用法」としての「ていうか」である。以下では、この用法の特徴を分析し、どのようなしくみで「ていうか」が新たな機能を担うことができるのかを明らかにしていこうと思う<sup>7)</sup>。

### 3.2 データ分析

では、まず(5)を見てみよう。

#### (5) Nao & Yui

01 : Nao : けっこう、鼻利かしちゃうよ、わたし、初対面とか。

02 : (.)

X

03 : Yui : でも、そうだよ、それもそうよね、わたしなにもつけてないから、なんでつ

04 : けてないのとかって言われるもん。

Y

05 : Nao : う：ん(.)うん。っていうかさあ、OLのころはわたしも ず：：：と、

06 : ギョームだったのね、

07 : (.)

08 : Nao : もう3年ぐらい?

09 : Yui : うん。

10 : Nao : ボトルを3本ぐらい買ったかな? =

11 : Yui : =うん。

12 : Nao : でもいいかげん飽きて、

13 : Yui : うん。

先の分析で明らかにしてきたように、「ていうか」は相互行為の中で修復先導の機能を担い、「XていうかX」という形式で用いられる傾向にある。この場合「X」は「X」の修復語であるので、「X」では、なんらかのトラブルの解決(たとえば、発話内容を明示したり、言い換えをすること)が行われているはずである。しかしながら、上記のデータ(5)では、「X」部分と「X」部分が修復の関係になっていないにもかかわらず、「ていうか」という修復先導で結びつけられている。いわば、「XていうかY」という形式(i.e. XとYは全く異なった要素)で使用されているのである。

では、データ(5)を詳しく見ていこう。(5)では、ナオとユイが「ギョーム」という香水について話題にしている。03行目から04行目では、ユイは、自分がどうして香水をつけないのかと他人から言われるということを話している。それにたいして、ナオは05行目で一端03行目から04行目のユイの話に「う：ん(.)うん」と言いながら同調を示しているが、すぐに「ていうか」を導入して、さらなる話を続けている。しかし、ここでは、「ていうか」の後には「X」に対する「X」にあたる修復語が導入されずに、修復とはまったく異なった活動をする発話がされていることに注目したい。ナオは、「ていうか」に続いて、自分自身の新

たな物語を語り始めているのである。05行目から06行目のナオの発言「OLのころはわたしもずっとギョームだったのね」は、その後何行にもわたって続くナオの物語の前置きとなる部分であり、それが「XていうかY」の「Y」の部分になる。また、07行目の短い間合いにも注目してほしい。一般的に物語の前置きが導入されると、聞き手は物語の進展を促進したり、阻止したりする何らかの反応を示すことが期待される。しかしながら、07行目において、ナオの物語の前置きに続いて起こることが期待されるユイの反応、つまりナオが物語を続けることを促進する発話又はそれ阻止する発話がない。そこでナオは08行目と10行目において、さらに物語を進めていくために、語尾を上げた発言（?マークは上昇イントネーションを表す）をすることによって、ユイの反応を引き出そうとしているのがわかる。ユイが07行目ですぐに反応を示せなかったのは、「ていうか」の後に修復語が導入されると予期していたにもかかわらず、ナオによって全く別の活動である物語の前置きが導入されてしまったことに起因しているのではないだろうか。

(5)に見られるように「転覆的用法」としての「ていうか」は修復先導ではない。形式上は修復を先導しているように見えるが、実際には修復とは全く異なった活動が行われている。まさに、相手の予測を裏切って、それまでの相互行為の流れを「転覆」させてしまう可能性があるのである。そのため、受け手は、それまでの相互行為の流れとは異なる流れの始まりに対して、うまく対処できない場合もある。以下の(6)を見てみよう。

(6) Yuki & Kuni

X

01 : Yuki : あのひと、小さいんだよね、水着が。それがちょっとね ::。

02 : (0.6)

Y

03 : Kuni : ていうか、夏なんだから、太陽の下で日差しを：、太陽を浴びてね。こどもは、

04 : 太陽を浴びないとさ ::。

05 : (0.4)

06 : Yuki : う：ん。ま：ね。

(長い沈黙)

(6)では、ユキとクニは浜辺に座って、話をしている。彼らは、二人の前に寝ている大人の女性を見て、彼女が着ている水着について話していた。01行目では、ユキは水着のサイズについて「小さいんだよね」と言及しながら、クニの方を向いて、同意を求めている。しかし、クニは、ユキが提供した水着についての話題には言及せず、03行目から「ていうか」に続けて、「こどもが太陽の下で日差しを浴びること」について、新たな話題を導入している。

この場合の「ていうか」も、「X ていうか Y」の形式で用いられる「転覆的用法」であることがわかるだろう。

ユキは、03行目のクニの発話を受けて、何らかの反応を示すことが期待されるが、ユキは、0.4秒の間合いに続く「う：ん。ま：ね。」というあいまいな返事しか返しておらず、それ以降も長い沈黙が続いている。ユキは、クニの「ていうか」という発話に続いて、01行目の自らの発話に対するなんらかの修復語が続くことを期待していたにもかかわらず、「こどもが太陽の下で日差しを浴びること」についての話題が提供されたことによって、この相互行為の流れにうまく対処できず、そのため、話が途切れてしまったと考えられる。

先にも述べたように、参加者は修復先導の「ていうか」に続いて、「X」の修復語である「X'」に相当する要素が、同一の参加者によって導入されることを予測している。このような予測可能性は、「ていうか」の修復先導の機能に支えられ、引き出されていると考えられる。さらに、この修復先導の機能は、個々の構成要素の文法的意味が複合して生み出されたものである。「ていうか」の後には、前の要素の修復語である要素「X'」が続くという、この予測を参加者が共有しているからこそ、「ていうか」の後に実際は全く異った活動を行う「Y」が、あたかも前の要素の修復語として連続性・関連性を保っているかのように、導入されてしまうのである<sup>\*)</sup>。しかし、一方で、「Y」が導入された後、その話題が相互行為の中で引き続き取り上げられるかどうかについては、受け手の反応しだいで、非常にあやういことにもなる。つまり、新たに導入された話題が引き続き取り上げられるためには、受け手の反応を引き出すように話し手側から働きかけたり、受け手側から積極的にその話題の進展を促進するような活動が行われることが必要なのである。

#### 4. まとめ

この論文では、「ていうか」という表現を例にして、相互行為と文法の関連性を予測可能性という概念のもとに結びつけて分析を試みた。データ分析に予測可能性という概念を導入することで、修復先導として機能することが多い「ていうか」という表現が、「転覆的用法」として用いられることがあることを示し、さらに、このような機能上の変化の一要因として予測可能性があることを明らかにしてきた。この予測可能性は、文法的意味によって支えられ、引き出されており、相互行為における参加者はそれを資源として使用している。この論文で取り上げた「転覆的用法」という現象が相互行為において起こるメカニズムをさらに考えていくためには、わたしたち分析者は一つ一つの発話を組み立てる文法とその文法に起因する予測可能性の両方を常に念頭に置いておく必要があるだろう。

「ていうか」の機能上の変化を見極めるためには、この論文で取り上げたデータだけでは質量ともに十分ではないかもしれないが、「ていうか」だけではなく、他の相互行為現象にも

「転覆的用法」という概念を応用可能なものにしていく素地を提供することはできたと思う。今後はデータを充実させ、分析を精緻なものにすることを課題にしていきたい。

注

- 1) 「ていうか」のバリエーションとして、「てか」「っていうか」なども含む。
- 2) データの出自について簡単に説明しておく。分析に使用したデータは友達同士の日常会話（約10時間）、テレビのインタビュー会話（約4時間）を録画録音し、書き起こしたものである。
- 3) 創作した会話例の提示とその分析は一般に会話分析の分野では行わないことであるが、この論文では読者に4つの修復のタイプをより深く理解していただくために、あえてここに挙げた。
- 4) (4)の05行目でマコは「う>:::ん」の後に「ていうか」を導入しているがこれは決して「う>:::ん」を修復しているわけではないことに注意してほしい。話者は一般的に選好性が低い活動をする際に何らかの音を発したり、「(う>:::ん)」、「(え>:::)」等）相手の直前の発話に同調する発言をして（「うん」、「はあ」、「ええ」等）からその活動をするといわれている（e.g., Pomerantz 1984）。修復活動においては、他者修復は自己修復に比べ一般に選好性が低いものとされている（Schegloff, et al. 1977）ため、この例においてもマコの「う>:::ん」はその後に続く他者修復の前の発話遅延を行っていると考えられる。
- 5) この論文では量的分析を目指していないので、数値による一般化、定式化はしない。数の多少に関わらず現象を分析することを通して知見を提示するという会話分析の指針に基づいているためである。
- 6) ③のタイプは今回のデータでは1例しかみられなかった。その例を（3）として載せたが、これは非常に特徴的な状況において発生した現象であることに注目してほしい。マイは01行目から02行目において発話の語尾を延ばしたり、間合いを入れたりしながら「言葉選び」という活動をしている。マイが03行目においても引き続き「言葉選び」をしていることは、彼女が「ていうか」の語尾を延ばして発話していることからわかるだろう。一般に言葉選びが長く続いた場合、聞き手が「言葉選び」に参加することは妥当と考えられている。よって、アヤがこのタイミングで発話を行ったことは、「言葉選び」という活動が行われていたこの状況において起こりえたと考えることができる。
- 7) 2001年の口頭発表では、「ていうか」のこのような用法を「形式上の修復（pro forma repair）」とした。しかし、その後、E.A. Schegloff氏から「pro forma repairではrepairであることになってしまふから、もしその現象がin other wordsとかI meanのようにrepairではない活動であるのなら、subversive repairと改名した方がいいでしょう」とコメントをいただいたので、用語の修正をした。しかしながら、この論文で、Schegloff氏が提言した「転覆性の修復（subversive repair）」ではなく、「転覆的用法（subversive use）」という用語を採用したのは、修復ではない活動を行う場合の「ていうか」が、修復活動の一部を担っているような誤解を与えてしまうことを防ぐためである。
- 8) ところで、「転覆的用法」に似た活動は、英語での相互行為においても見られることが報告されている。たとえば、in other wordsというフレーズは通常は修復先導として用いられるわけだが、実際にはin other wordsの後には修復語が導入されることがあり、その場合のin other wordsはターンを取るための手段の一つとなっている（Schegloff 1987）。相互行為における修復という活動は、相互行為の接続上、他の活動に比べ優先的であるため、これからターンを取ろうとしている者は、修復先導をターンの始めに導入することで、話し手になる特別な権利を得ることができるのである（Sacks et al. 1974）。

参照文献

- Fox, B. A., M. Hayashi and R. Jaspersion 1996. "Resources and Repair: A Cross-linguistic Study of Syntax and Repair." In E. Ochs, E. A. Schegloff and S. A. Thompson (eds.) *Interaction and Grammar*, 185-237. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kuno, S. 1973. *The Structure of Japanese Language*. Cambridge: MIT Press.
- Hayashi, M. 1997. "An Exploration of Sentence-final Uses of the Quotative Particle in Japanese Spoken Discourse." In H. Sohn & J. Haig (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*. Vol. 6, 565-581. Stanford: CSLI Publications.
- Hayashi, M. 2000. *Practices in Joint Utterance Construction in Japanese Conversation*. Unpublished Doctoral Dissertation. University of Colorado, Boulder.
- Hayashi, M. and J. Mori, 1998. "Co-construction in Japanese Revisited: We Do 'Finish Each Other's Sentences.'" In N. Akatsuka, H. Hoji, S. Iwasaki, and S. Strauss (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*. Vol. 7, 77-93. Stanford: CSLI Publications.
- 本名信行. 1999. 「若者用語」『現代用語の基礎知識』東京：自由国民社. 1077-1080.
- Itani, R. 1996. *Semantics and Pragmatics of Hedges in English and Japanese*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Maynard, S. 1998. *Principles of Japanese Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 西阪仰. 2001. 『心と行為』東京：岩波書店.
- 沖裕子. 1999. 「手のひらの言語学・質問 21：若い人が使う「ていうか」はどんな言葉ですか」『言語』Vol. 28 No. 5.
- Pomerantz, A.M. 1984. "Agreeing and Disagreeing with Assessments. Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes." In J.M. Atkinson and J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. 1974. "An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation." In R. Baumann and J. Sherzer (eds.) *Explorations in the Ethnography of Speaking*, 337-353. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H., E. Schegloff, and G. Jefferson. 1974. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation." *Language* 50, 696-735.
- Schegloff, E. 1987. "Recycled Turn Beginnings: A Precise Repair Mechanism in Conversation's Turn-taking Organization." In G. Button and J. R. E. Lee (eds.) *Talk and Social Organization*, 70-85. Clevedon: Multilingual Matters.
- Schegloff, E. 1992. "Repair after Next Turn: The Last Structurally Provided Defense of Intersubjectivity in Conversation." *American Journal of Sociology*. 97 (5), 1295-1345.
- Schegloff, E. 1997. "Third Turn Repair." In G.R. Guy, C. Feagin, D. Schiffrin, & J. Baugh (eds.) *Towards a Social Science of Language* 2, 31-41. Amsterdam: John Benjamins.
- Schegloff, E., G. Jefferson, and H. Sacks, 1977. "The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation." *Language* 53, 361-82.
- Tanaka, H. 1999. *Turn-taking in Japanese Conversation*. Amsterdam: John Benjamin.
- Tanaka, H. 2000. "Turn Projection in Japanese Talk-in-interaction." *Research on Language and Social Interaction*. 33:1, 1-38.
- Tanaka, H. 2001. "Adverbials for Turn Projection in Japanese: Toward a Demystification of the 'Telepathic' Mode of Communication." *Language in Society* 30, 559-587.

寺村秀夫, 1982. 『日本語のシンタクスと意味』東京: くろしお出版.

## 付 録

データの転記について (転記に用いている記号については、西阪, 2001 を参照した)

### 1. 密着

二つの発話もしくは発話文が途切れなく密着していることは、等号 (=) によって示される。

### 2. 聞き取り困難

聞き取り不可能な箇所は、(.) で示される。空白の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。

### 3. 沈黙・間合い

音声途絶えている状態があるときは、その秒数が (.) 内に示される。0.2 秒以下の短い間合いは、(.) という記号によって示される。

### 4. 音声の引き延ばし

直前の音が引き延ばされていることは、コロンの (: ::) によって示される。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。

### 5. スピード

発話のスピードが日立って速くなる部分は右開きの不等号 (<)、遅くなる部分は左開きの不等号 (>) によって示される。

### 6. 音調 (イントネーション)

語尾の音が上がっていることは疑問符 (?) によって示される。語尾の音が下がって区切りがついたことはピリオド (.) によって示される。音が少し下がって弾みがついていることはカンマ (,) によって示される。